

＊連載 政治・行政・市民―地域への「責任」⑤

数百年の時を、今に伝える秘境

―新しい時代の風をつかんだ企業と村・五箇山(相倉&菅沼)集落―

福田 志乃 地域経営コンサルタント(地域政策プランニング代表)

世界のトヨタと白川郷をつないだ「運命の糸」

前回は、世界文化遺産である白川郷(岐阜県側)での地域住民や村役場、関係組織の取り組みを見た。国や地方の財政が破綻寸前といわれる日本において、エージェンツに依存した団体客誘致策にも驕りが見え始めている上、環境や文化への理解(真の興味)が乏しい団体客の意識の問題もあり、年間の観光客入り込みが百五十万人に達する白川郷ですら、もはや「観て、泊まって、食べて……」といった従来型の観光では自立的に生きていけない。世界遺産登録後十年になるそんな節目に、世界ナンバーワンへの道をひた走るトヨタ自動車(以下、トヨタ)が、二〇〇五年四月から、白川郷で新しい社会的貢献事業を開始したのである。そこで、五箇山(富山側)の話に入る前に、世界のトヨタと世界遺産の白川郷という「ビッグな提携」について、裏話を含みながら、もう少しご紹介してみよう。

一九九九年、トヨタは世界初の量産型ハイブリッド車の発売、環境マネジメントシステムの構築や環境情報の積極的な開示などが評価され、環境保護・改善に功績がある団体として国連環境計画(UNEP)から「グローバル500賞」を受賞した。これを記念し、トヨタは翌二〇〇〇年から

社会貢献活動の一環として、「環境改善に資する環境技術・環境人づくり」を目的とした民間非営利団体(NPO)等の環境活動へ、毎年二億円規模の助成「トヨタ環境活動助成プログラム」を開始。その後、三カ年で三十八プロジェクト、総額五億六千万円を助成している。ただし、この助成プログラムは、助成申請金額に上限を設けなかったためか、比較的規模の大きなプロジェクトが多く支援される結果となった。

今年度は、新たな試みとして、その助成プログラムの中に「日本国内で実施され、将来の発展性に期待できる小規模プロジェクトや地域に根差した「草の根活動」となる小規模プロジェクト枠(助成上限額は二百万円)を設けた。

そんな社会貢献事業を続けるグローバル企業が、〇五年四月、人口二千人弱の白川村に「トヨタ白川郷自然学校」(以下、自然学校)を開校したのである。トヨタと旧日本環境教育フォーラムと白川村の三者が提携し、「日本一美しい村に、日本の自然学校を」をスローガンに、国内外の環境NPOと協力関係を築きながら、自然体験や伝統文化体験や環境技術体験ができる環境教育・啓発活動の一大拠点を形成するのが目的である。

「負の要素」を「プラスの資源」に変える

実は、今年開校された自然学校の広大な土地(百七十二畝)は、白川村で集団離村が続いていた時期である一九七三年に、トヨタが従業員のための養施設として買い上げた土地だ。名古屋圏に本社を構えるトヨタとしては、飛騨の山奥の雄大な自然は魅力的だった。しかし、八一年の豪雪で施設が倒壊。その後のバブル経済期にも、その豪雪地帯に新たな施設計画は持ち上がらず、白川村に購入した広大な土地は、トヨタにとって「使い道」

図表5-1 トヨタ白川郷自然学校のプログラム

【自然体験】	【伝統文化体験】	【環境技術体験】
<ul style="list-style-type: none"> ・ブナ原生林の散策 ・広葉樹を植林・育林し、森林生態系の再生を試みる ・白山登山を通じて体力と気力を高める 	<ul style="list-style-type: none"> ・合掌造りの歴史や建築技法を学ぶ ・蚕の繭から糸を取って絹の織物を作るなど伝統工芸を学びつつ新しい試みも加える ・「雪のレストラン」など豪雪を楽しむに変え、いかに雪を克服するかに挑戦 	<ul style="list-style-type: none"> ・太陽光発電や廃材による暖房（ベレットストーブ）、雪による冷房など、自然のエネルギーを利用した快適な生活＝自然との共生＝を体感 ・ミニ水力発電に挑戦 ・簡単燃料電池づくり

(パンフレットより抜粋)

の無いものとなっていた。一方の白川郷では、前回の記事で紹介したように、七〇年代には減りゆく合掌家屋を保全する住民運動が活発化する。八〇年代は、十年後には世界遺産に登録されることなど誰一人考えることもなく、住民たちは、文化財保護法の改正に伴う「重要伝統的建造物群保存地区」(伝建地区)への登録への地道な動きに奔走していたのである。七〇、八〇年代当時、そんなトヨタと白川郷の間に大きな協働事業の夢が生まれていなかったのは当然だろう。

この空白の地に新しい時代の風が吹き出したのが、九五年の白川郷の世界遺産登録であることは間違いない。観光地化が急速に進み出す半面、宿泊施設等の整備が制約される白川郷にとっては、トヨタの所有する広大な土地の有効活用が一つの「鍵」と思われた。一方のトヨタの方でも、先述したように九九年には「環境」に関するグローバルな賞を受賞。白川村からの土地の有効利用の話もあり、〇一年には「環境をテーマとした教育機関づくり」の構想が社内全体でオーソライズされた。幸運なことに、〇五年にはトヨタの本拠地の愛知県で、環境をテーマに「愛知万博」(愛・地球博)も開催される。そこで、「自然学校の開校は、万博開催に合わせる」ことがトヨタの企業戦略となり、事業計画が一気に転がり出した。〇一年には、今度はトヨタ側から白川村役場や村議会議員、地域の区長たち、「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」、観光協会などに事業構想を説明。

トヨタと(社)日本環境教育フォーラムと白川村の三者による施設の在り方やプログラム内容の検討が始まり、また、〇四年十月には、自然学校の運営主体としてこれら三者によるNPO法人「白川郷自然共生フォーラム」が設立された。「白川郷自然共生フォーラム」に対して、トヨタが自然学校の運営を委託する形である。そして、NPO法人を設立した関係者たちの胸中には、「白川郷全体を自然&文化教室の舞台とし、村民みんなが先生となる」ような理想郷への夢がある。将来的には、このNPO法人が環境教育・啓発活動とともに、環境に関して世界をリードする人材を育成する機関にまで育つことへの期待の方が大きいのだ。

オープンして三カ月。〇五年の夏休みには全国各地から約三千人が自然学校に参加し、夏の体験プログラムを楽しんだ。その際、自然学校に登録した白川郷の住民たち十数人が、ボランティア・ガイドとして白川郷集落を案内。一方の参加者(家族)たちも、集落を散策するときに、自分たちが関心を持ってデジカメに撮影するテーマを決め、夜のスライドショーではお互いの写真を発表し合い、村の住民や初対面の家族たちと交流を深めたという。自然学校の「第一歩」は、まずまず、順調に踏み出された。

さらに注目すべきは、自然学校では一年を通して事業として、さまざまな環境関係の民間やNPOたちが図表5-1にあるようなモデル事業を実践している点である(詳細は、「トヨタ白川

郷自然学校」のホームページ <http://www.toyota.eco-inst.jp> を参照)。これを見ると、どのプロジェクトも次世代の農業技術や科学技術、文化形成につながるハイレベルな実践ばかり。あまりの「夢の壮大さ」や「実行力」に圧倒され、「白川郷は、過去と未来とをつなげる、「環境」をテーマとした人類の活動のメッカに化けるかもしれない」などと想像を膨らませてしまうのは、筆者だけではないだろう。今後の発展を見守りたいプロジェクトである。

「史跡」に息づく豊かな暮らし

さて、ここまでは、世界文化遺産「白川郷・五箇山の合掌造り集落」のうち、岐阜県側の白川郷を見てきた。ここからは、富山県側の五箇山(相倉&菅沼集落)をご案内する。

実は、実際の取材では、筆者は白川郷と五箇山という連載の順序とは逆に、富山側から入って白川郷(岐阜)を通り、飛騨高山に抜ける四日間のルートで移動している。筆者の住む幕張(千葉市)を午前十一時に出発し、東京から越後湯沢まで上越新幹線に乗り、そこで北陸本線(特急)に乗り換えて高岡へ。散居景観とカイニヨ(屋敷林)で知られる田園風景を眺めながら、地元の高校生たちで満員のローカル列車・城端線で終点(城端駅)まで行き、さらに、そこから一日に四本しかない長距離バスに一時ほど揺られ、五箇山の相倉集落の民宿に無事到着したのは夕刻の七

時。取材は、そんな八時間の乗り物の旅から始まった。

白川郷から先に入らなかったワケは、旅の行程を調べているうち、個人で五箇山の相倉と菅沼の二集落を一つ一つ訪れて取材して廻ることが、時間的にも体力的にもいかに大変であるかに気付かされたからだ。バスやタクシーがあまりに少なく、希望通りに集落間や施設間を移動することができない。これまで、地域経営コンサルタントとして、多くの離島や山間部の過疎地に入ってきた筆者にとつて、船やローカルな列車や地元のバスでの移動は好奇心をそそるもので、自らが自動車を運転しないハンディなど苦に感じたことはなかったが、この四日間の旅で筆者は初めて「音」を上げた。それもそのはず、当地は一九六〇年代まで物理的に地域外との交流がかなわず、国内でも最もアクセスが困難な地域の一つに数えられた「日本に残された最後の秘境」「陸の孤島」とまで称された地域だったのである。

結果的に、筆者が取材でお会いした方々に次の地点まで運んでもらうといった多大な迷惑をおかけしたのだが、しかし、最高に心豊かな旅であったことは間違いない。

物哀しい伝説や史実が、風情や美しさに

ところで、この「五箇山」という呼び方の由来だが、富山県と岐阜県と石川県の三県境にあつて尾根や谷が南北に襲(おそ)のように走る地形を「五ヶ谷

間」と言っていたものが、時代とともに五箇山と変わったとされる。集落は谷間の庄川沿いの平坦地(河岸段丘)に点在し、その規模は百世帯ほどのものから十世帯を潮るものまでさまざま。それらの集落のうち、世界文化遺産に登録されたのは、特に昔ながらの集落景観と生活様式を残していた旧平村の相倉集落と旧上平村の菅沼集落の二つだけだった。ここで「旧」と記したのは、五箇山地域には昨年〇四年十月までは平村と上平村と利賀村の三村が存在し、全部で六十の集落があつたが、その村々もさまざまな政治的駆け引きに翻弄され、結果的に文化圏の異なる砺波平野の五町村と平成の大合併を遂げてしまったからである。

しかし、冬になれば雪が数日も積もる人里離れた山間の、「最後の秘境」と言われた五箇山地域には、遠い昔から、どこか哀愁を帯びた伝説や史実が幾つも伝わっている。八世紀頃には白山を信仰の対象とする山岳信仰の修験の行場と位置付けられていた。その後、十二世紀後半には、源氏との戦いに敗れた平家の落人がこの地で農耕を営みながら隠れるように暮らしたと言われる。今では、平家の落人たちが農耕をしながら唄ったとされる、当地に伝わる三十曲すべての民謡が国の重要無形民俗文化財に指定されている。

江戸時代の十七世紀には加賀藩の下に置かれ、この地方の豊かな雑草を利用して火薬の原料である塩硝(硝酸カリウム、硝石)を生産していた。塩硝は重要な軍事物資として藩から庇護される一

図表5-2 菅沼集落のたたずまい(庄川の対岸から臨む)



方で秘匿したため、五箇山のような秘境の家屋の床下で生産するのが都合だったのだ。また、「能登は遠島の地、五箇山は流刑の地」と言われたように、加賀藩の政治犯が五箇山に送られ、集落の住民たちが牢番をしたと伝えられる。川を渡す手段がなかった時代、山葡萄のツルで編んだロープが庄川に渡され、政治犯たちもツルで編んだ籠に乗せられ対岸に移されたのだそうだ。

このように書いてくると、読者には、五箇山は

哀しく暗いというイメージを与えてしまったかもしれない。しかし、五十年ほど前まで秘境だったからこそ、まるでおとぎ話か絵本か、夢の中の一場面を思わせるような美しい山河に囲まれた集落が、数百年前の姿のままに残されたのである(図表5-2、筆者撮影)。開発が進んで自然や歴史を刻んだ景観が尽く失われた上、利便性や効率性がばかりが追及される慌ただしい日本の中に、数百年の時を止めたような風景と温かい人々の生活が「現存」していたのか……と、筆者は心の奥から沸き上がる喜びをため息まじりに感じていた。

さらに調べていくと、なるほど、その言葉にならない美しさを、詩で表現なされた方々がいらした。お一人は、皇太子殿下で、一九九一年の「歌会始の儀」で「五箇山をおとづれし日の夕餉時森に響かふこきりこの唄」と詠まれている。これを詠まれた九一年当時、皇太子殿下は、さらに十余年前の高校時代に訪れられた五箇山を想い起こされて詠まれたというのだから、よほど五箇山の風情や人々の温かさに心動かされたのだろう。

もうお一人は、皇太子殿下の弟君でいらつしやる秋篠宮殿下。「世界で三方所、好きどころがある」と仰られた場所の一つが、この五箇山なのだそうである。こうしたエピソードが物語るように、日本の皇室の方々がこよなく愛される五箇山の魅力——それを、筆者が言葉にできるはずもない。

それにしても、白川郷は世界遺産として知名度が高いが、「五箇山」という地名を知り、かつ、

それが世界遺産だと知っている人は、そう多くはないだろう。そこで今度は、白川郷とは異なる世界遺産登録への道程についてまとめてみよう。

厳しい史跡指定から世界文化遺産へ

五箇山地域では、戦後、急速に進められた道路やダムの整備等の山村開発により、住民の生活様式が激変。合掌集落は減少の一途をたどる中、六年に五箇山地域にとつては悲願だった五箇山トンネルの起工式が行われた。

ところが、同年、文化庁が保存調査を開始し、七〇年には相倉・菅沼の二集落を国の文化財保護法の下で史跡に指定するという措置が取られる。史跡指定されると、集落の景観(外観)を変えられないことはできない——例えば、勝手に樹木は切れないし、自分の垣根の一個所すら勝手に修復できないという厳重な保護制度だった。集落の後背にある斜面地の広葉樹(ブナ、トチ、ナラ等)についても、集落を雪崩から守る「雪持林」として伐採が禁じられた。

そうした史跡指定に対し、当時の住民の間では困惑を隠し切れず、「100%の国の保護の下で、自分たちの故郷を守る」との肯定的意見と、「自分たちの生活の場を史跡にし、自由を失わせるとは(国は)理不尽」との否定的意見の両論に分かれたという。その後、三十五年たつて世代や価値観が変わってくると、住民の中には、今度は「国が家屋を買い上げて住民には新たな住宅を用

意し、「史跡」として国が保存すればよい」との
 声も生まれている。○五年七月現在、相倉集落に
 は二十世帯、菅沼集落には九世帯の人々が暮らし
 ているが、こんな過疎の小さな集落でさえ、地
 域ぐるみで共通の価値観を持ち、あるいは維持
 し続けることは多難なのが現実なのだ。

ところで、**図表5-3**を見ていただきたい。こ
 れは、相倉集落と菅沼集落が受けた、文化や景観
 やコミュニティに関するさまざまな「賞」であ
 る。一九八〇年代から、日本国内で、「国の表彰」
 が次々と創設された背景もあるが、十、二十戸の
 知名度も高くない山村集落が、いかに評価され密
 かにファンを獲得し続けていたかが一目瞭然だ。
 興味深いのが、前回ご紹介した白川郷とは異な
 る、世界遺産登録までの道程である。白川郷では、
 一九七〇年代前半に住民の保存運動が先行し、
 「伝建地区」という保存制度が後追いの形で創ら
 れ、七六年にその第一号に指定されている。一方
 の五箇山集落は、七〇年に史跡指定を受けた後は、
 県立自然公園として保護(庇護)された。ここで、
 白川郷と五箇山の二枚の年表を並べて見ると、面
 白い事実が浮かび上がる。九二年九月、日本政府
 が世界遺産条約を批准し、白川郷が今後五十年
 の間に政府が推薦する世界遺産の候補としての一
 歩を踏み出した時には、一方の五箇山地域は世界
 遺産の話は持ち上がっていない。

しかし、翌九三年三月、文化庁が相倉・菅沼集
 落に、「世界遺産に、白川郷と一括推薦したい」と

の説明をしており、両集
 落の合意を経て、九四年
 九月に、日本政府が「暫
 定リスト」に「白川郷・
 五箇山の合掌造り集落」
 として掲載。同年十二月、
 五箇山地域には、急遽
 (？)、伝建地区指定の

法の網が掛けられている。
 そして翌年の九五年に、
 白川郷・五箇山地域の両
 方合わせて正式な世界文
 化遺産に登録されたわけ
 だが、こうしてみると、
 世界遺産登録の舞台裏で
 は、当時の国の恩恵が可
 なり憚たたくしく働いてい
 たことがうかがわれる。
 おそらく、白川郷では

「住民主体の動き」があつたが、集落が大きいう
 えに、合掌造りの家屋でない建物の混在もかなり
 進んでいた。一方の五箇山は「国の史跡」として
 扱われてきたために「徹底的な家屋や土地利用の
 保存」が成されてきたものの、行政主導で地域づ
 くりを進めてきた感がある。今もなお人が暮らし
 ている民家の世界遺産登録には、白川郷と五箇山
 双方の長所(住民の主体性による保全活動の担保
 と、国主導の徹底した保存)が必要不可欠だった

図表5-3 相倉集落(旧平村)の受賞実績

1987年	・「合掌家屋と民謡こきりこの里」に「手づくり郷土賞」(建設省)
1989年	・「調いのあるまちづくり」で自治大臣表彰 ・相倉合掌集落に「手づくり郷土賞」 ・越中五箇山麦屋節保存会に郷土民俗文化財保存伝承で「地域文化功労」文部大臣賞
1990年	・平村に「全国山村連盟会長賞」
1994年	・「美しい日本の村」景観コンテストで農林水産大臣賞 ・「緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰」受賞 ・「白川郷・五箇山の合掌造り集落」が世界遺産条約に 基づく「世界遺産一覧表」への記載推薦決定 ・越中五箇山筑子唄保存会に文部大臣表彰
1995年	・「白川郷・五箇山の合掌造り集落」世界遺産登録決定
1997年	・全国町村会優良町村表彰受賞 ・平村消防団に消防庁長官表彰 ・平高校が全国高等学校総合文化祭の郷土芸能部門で 文化庁長官賞受賞
1999年	・平村食生活改善推進協議会に厚生大臣表彰 ・農村アメニティコンクールで国土庁長官賞 ・平村郷土学習会に文部大臣賞
2000年	・相倉史跡保存顕彰会に文部大臣表彰

ことが推測される。

真の「農山村グリーン・ツーリズム」の出 遣い

それでは、深い歴史を刻んだ世界文化遺産、相
 倉・菅沼集落の日頃の生活を覗いてみよう。日本
 では、県レベルで旗を振り、農山村と交流し生活
 を体験するグリーン・ツーリズムを掲げて集客を
 目指すところが多い。しかし、全国二百近い地域

図表5-4 相倉集落の民宿での山菜づくりの夕食メニュー

【宿泊客としての一般的なメニュー】

- モミジカサ(山菜の王様)のおひたし
- せん菜(わさびの葉)
- 山椒の葉(13~14cmと巨大)、ヨモギ、タラの芽、フキノトウの天婦羅
- フキと山椒の和え物
- アユの塩焼き(今日、川で釣れたもの)
- 山椒とナメコの味噌汁

【夕食後、女将さんや若旦那や土地の方々との雑談がてらのおもてなし】

- ミズとニシンと揚げ豆腐(特産物)の煮物
(お客には出せない家庭料理とか)
- ミツバのおひたし(言われなければミツバとは分からないほど巨大)
- 行者ニンニクの醤油漬け
(行者ニンニクは植えてから食べるのに7年かかる貴重品)
- 土地のお酒「三笑楽」など

(自治体)を訪れてきた筆者に言わせれば、大半の地域でグリーン・ツーリズムはうまくいっていないと感じている。どこか住民が心底楽しんでいないような、地域の中にしつとりと馴染んで(溶け込んで)いないような、いわば行政的な「体験・交流策」ばかりが多過ぎるのである。だが、五箇山には「真の農山村のグリーン・ツーリス

ム」と言えるポテンシャルが存在し、間違いない。そこは誰もが惚れだしたしさを忘れて心豊かになれる場だった。

ちなみに、筆者が言うグリーン・ツーリズムのポテンシャルとは、①「景」(風景・環境)②「生」(生活・文化)③「人」(もてなし、コミュニティ)④「食」(地の素材・味覚)⑤「楽」(住民自身が楽しむ、旅行者の大満足)——である。具体的に、相倉集落でのポテンシャルを以下に列挙してみる。

◆自然や環境や景観に、「ここにしかない」特別な美しさがあること。「美しさ」を語る場合、「過去(歴史や自然)を死守し続ける」ことが必ずしも正しいとは言えない。しかし、農山村でも農地が荒れ、山の斜面が切り取られ、工事現場が土煙を上げる景色を眺めながら、整備された幹線道路を走って、「旅の目的地」に到着する観光地も少なくないのに、五箇山ではそこにたどり着くまでの交通不便な旅も、また心豊かに感じられる美しさがある。

◆「村全体の美しさ」を住民誰もが認識しているコミュニティの存在。維持する「大変さ」の中にも住民みんなが自然・環境を守ることを是とし、守るべき生活文化(様式)を実践し続けていること。国の史跡と世界遺産という「重い課題」を背負う義務があるとはいえ、家屋や垣根一個所を修繕するにもコミュニティに語り、コミュニティで決めていく自治運営が根付いており、そ

れが結果として集落全体の美しい景観をつくり出している。

◆日常とイコールの素材で温かい「おもてなし」があること。住民が生活している合掌家屋の空いている部屋を、旅行者の泊まる部屋として開放するだけでなく、居間の囲炉裏を囲んでの食事や、住民(民宿経営者)や他の旅行者との楽しい団欒が自然体で展開される。合掌民家の人たちは、訪れてくる初対面の人を、笑顔で「我が家」に迎え入れてくれるのだ。

◆合掌造りの家屋の素晴らしいこと。世界の建築の巨匠が、日本の中でも独自性の高い建築物と評価しただけあって、茅葺き屋根の外観、釘を一切使わない梁や柱の組み方、囲炉裏を中心とした廊下や和室の配置などに、昔からの大所帯の生活様式や暮らしの知恵を見いだせるのも、大家族を忘れてしまった現代人にはまた楽しい。

◆そして何より、土地の素材を土地の味付けで、地酒とともに頂く山村の家庭料理(図表5-4参照)。山の中ですくすく育った山菜、裏の田んぼで取れたふつくらしたお米、清流で取れたばかりの川魚……などが、ズラリと並ぶ。十数もの山菜の中には、都市部では聞いたこともないものやまったく違う料理方法で頂くものなどがたくさんあり、また、川魚は目の前の囲炉裏で焼いてくれるなど、美味しさに加えて楽しいことといったら格別なのである。

今回の取材で筆者が泊まった宿(相倉集落)は、部屋数の制限もあって一日に三組しか泊まれない。その日は偶然(幸い)にも、東京から来ていた旅行会社の二人の男性客と、囲炉裏を囲んだ夕食から一緒に食べた。そのためか、村の観光関係の人たちも遊びに来て、女将さんや若旦那も一緒になつてお喋りしたり、笑い転げたり……。挙句、「お客さんには出せなかつた家庭料理」とか、「今年のお客さんには出せなかつた春の食材」とか、「土地では人気ナンバーワンのお酒」とか、泊り客向けメニューにない郷土料理をたくさん頂くことになってしまった。

初夏の夜。古い家屋の囲炉裏を囲み、見知らぬ同士の間に、五箇山の少し前の昔話や今後の夢に花を咲かせる。地方部では久々に味わった「豊かなおもてなし」であり、「そこにしかない生活」にすつかりハマッタ気分になった。しかし、筆者が「村人の心の中に、グリーン・ツーリズムの原点がある」と感じて、民家(民宿)の方々は「グ」の字も意識していない。むしろ、「こんな山奥に、また、足を運んでもらい、素晴らしいところ!と喜んでほしい」と言われるのだから、その無欲な素朴さに、また惹かれ直してしまう。

そして、そうした人や地域の魅力が、また新たな人の流れを創り出している。相倉集落では徐々に農業の担い手が減少し、荒れた田んぼが世界文化遺産の風景を阻害し始めていた。そこで、○五年の春から棚田のオーナーの募集を開始したとこ

ろ、早くも二カ月で十二組の家族が応募してきたのである。その中には、土いじりの好きな社員(家族)が田植えや稲刈りに参加できる福利厚生現場として借り上げている民間会社も含まれる。世界遺産の土地に自分の田んぼを持てた上、それを理由に、季節的にも素晴らしい春と秋に五箇山に通って来られるなど、何とも贅沢なオーナーたちであるが、今後、こうした小さな地域が魅力を維持し、生き残るには、観光客の数を増やすだけではなく、地域づくりに参加してくれる。地域外ファンへの獲得も一つのコア戦略と言える。

誰が、世界遺産地域をプロデュースするのか?

前回と今回にわたって、日本の世界文化遺産である「白川郷・五箇山の合掌造り集落」の暮らしや地域振興の取り組みを見てきたが、地域経営コンサルタントとして筆者が強く感じたことがある。それは、筆者は先に、白川郷と五箇山の世界遺産の登録では国の思惑が慌ただしく働いたのではなにかと書いたが、その筆者の想像を裏付けるかのよう、白川郷と五箇山地域との間では、当時から今も「世界文化遺産地域」としてのつながりや一体的な取り組みが、実は生じていないという課題である。富山県と岐阜県という異なる行政庁に所属していることもあるのだろう。しかし、これら両地域を広域的な文化・観光資源として総合的にプロデュースし、グローバルに発信する主体がな

食と健康の正しい関係、徹底説明!

食材健康大事典

基本の栄養素から保存方法まで、食材に関するお役立ち情報満載!

●A5判変型・並製オールカラー・560頁●定価3990円

ということ、何とも残念でもつた話ではない話である。

ましてや平成の大合併により、相倉・菅沼集落は、五箇山地域というよりも生活様式や文化圏の異なる砺波平野の自治体に、事実上、吸収された。今後、ますます財政が苦しくなるにつれ、ずっと砺波平野部で暮らしていた人々には、五箇山地域の世界に誇れる文化的な価値に気配りする余裕などなくなるかもしれない。

合併した直後の○五年七月現在では、村役場から地域の行政センターとなった旧平村・旧上平村の職員が、新しく産声を上げた南砺市の観光課に席を置き執務するが、小さな集落のことを熟知した職員(地元民)が、いつまで市本庁の文化・観光行政に携われるかの保証もない。行財政のスリム化に伴い、文化・観光・地域振興を担当する部署に相倉・菅沼集落の職員が配置されなくなることも、あるいは、地域ごとの現場の行政センターに同部署の権限が移譲されないことほど、当集落の世界遺産としての価値の存続に「危機」をもたらすことはないだろう。いや、そんなことを言う前に、なぜ、関係する県や国が「自分たちの価値」として世界遺産地域を、グローバルな視点か

ら総合的かつ戦略的に活用しないのが、筆者には不思議でならないのである。

合併問題では、五箇山地域も白川村も大揺れに揺れた。しかしその際、上位行政機関では「世界遺産エリアの括り」で、今後、世界に誇れる地域をどうするか」の議論など皆無だったようだ。確かに、白川郷では増え過ぎる観光客にどう対応するかという課題があり、対照的に、一方の五箇山では知名度の向上とともに観光客誘致が課題だ。文化・観光や地域振興の点で、行政課題上の共通点はないようにも見える。さらに相倉・菅沼集落が南砺市に属してからは、白川郷からの心理的距離は一層開いたのも事実だろう。

しかし、世界遺産に登録する時だけ、国や県が「合掌集落の保存」を掲げて懸命に旗を振り、登録後は「地域づくりは、地元行政と住民の責任」としたのでは意味がない。そもそも、「世界遺産とは、誰のための遺産なのか?」。地元の住民や自治体か? 日本政府か? あるいは、ユネスコか?——定義に戻ると、「世界の宝物」とあるが、ユネスコではないことは明確だ。

行政の「横割り」を超えたプラットフォームを 保全と振興を、両立させるために

特に、白川郷と五箇山地域が、京都や奈良の古都や姫路城といった他の世界文化遺産と決定的に違う点は、保存すべき建造物の中に「今でも、

人々の生活が息づいていること」(「生計」が必要なこと)である。国が世界遺産の地域に対し、

「世界遺産として保存する資金は助成するが、生活様式も景観も一切変えることなく、保存法に基づいて保全し続けてほしい」と言うのでは、その毎日毎日繰り返される住民たちの地道な努力を理解しているとは言えない。

白川郷や五箇山など、人が暮らす場所における世界遺産登録の意味には、地元(住民・関係者)、市町村、県、国のすべての関係者が、現在あるいは将来起こり得る課題を十分に分析・共有し、「今後、地域における生活や生計、地域振興や観光など、トータルな地域戦略をどうしていくか」を同じテーブルで議論し、「グローバルな評価に

応え続けられるか」を関係者みんなが自覚していくこと(誇りの共有)に最大の意味があるように思う。

白川郷や五箇山地域では、二年後の〇七年に全線開通する東海北陸自動車道が、この地域の振興(衰退)を左右するとの指摘がある。そんな課題を誰も知りながら、誰も打つ手が無いのが今の現実である。自動車道のもたらす移動交通の広域化(動向)を広域的な視点から分析し先読みできるのは県行政レベルであり、「地域振興の問題は集落や旧村内で解決せよ」というのでは120%の無理がある。ましてや、世界に向けては一つの世界遺産として登録しているのだから、富山県と岐阜県が同じ文化(観光)施策として、その振

興策もPR策も一体的に考えていく姿勢は最重要だろう。

さらに、複数県にまたがるような施策については、そのテーマ全体を年に二回ほど議論するプラットフォーム(基盤)を用意する主体(事務局)が国であつてもおかしくない。

こうした異なる行政レベルや行政区を超えて、関係者が同一テーブルに着き、現場の課題に対してそれぞれの情報やノウハウを一元化していくことが、筆者の提唱する地域政策というものだ。そうしたプロセスを経なければ、現場重視の連携も役割分担も実現できるはずがないからである。

筆者は、今の日本では、「自然や文化の保存や保全では飯を食えない」という価値観やジレンマからの脱却が重要であり、「保存・保全と地域振興が両立できる」新たな振興政策への思考が求められているように感じている。「白川郷・五箇山の合掌造り集落」の世界遺産登録十年を機に、「世界遺産を保全するための予算」を管理・執行することを仕事とする国や県ではなく、世界遺産の地域で暮らすこと、あるいは訪れることの「価値」や意味を、もう一度、地域とともに現場から見つめ直してほしいと願いたい。

●訂正 12月8日号「*連載 政治・行政・市民―地域への「責任」②」の6頁上段6行目の「豊橋建設事務所」を「豊科建設事務所」現・安曇野建設事務所」に訂正します。

編集部